

レポート課題

溝口研究室 Mizo lab. ホームページの Topics の記事の中から 2 つを選んで読み、講義を聴いたことを参考にしながら、「あなた自身ができそうな被災地の農業再生について」考えを述べよ。A4 で 1 枚から 2 枚程度にまとめて提出すること。

<内容>

本レポートでは、溝口研究室 Mizo lab. ホームページの Topics の記事の中から 2 つ（「飯舘村に通いつづけて約 8 年 土壌物理学者による地域復興と農業再生」・「農業農村開発の技術を考える」の 2 つを選択した。これ以降、前者を記事 A、後者を記事 B と表記する）を選択し、これらの記事や水と土の環境科学の講義内容を参照しながら、僕たち自身ができそうな被災地の農業再生についての考えを述べる。

記事 A では、2011 年の原発事故の発生後に溝口先生が地域復興や農業再生のために行ってきたことについて、飯舘村での除染活動を中心に論じられている。この記事を通して、独自の除染方法である「までい工法」の実践、農地再生と地域復興の一環としての特産品開発（純米酒「不死鳥の如く」の開発）、地域の未来を担う子どもたちへの教育活動など、科学者としての溝口先生の不断の努力を垣間見ることができた。一方で、「までい工法」は大量の汚染土を排出することのない非常に効果的な除染方法であるにも関わらず、日本政府はそれを採用しようとしなかったということも述べられている。「までい工法」は科学的根拠があり現行のものよりも優れた除染方法であるにも関わらず、実用化されなかったという事実は、理解しがたいものである。

記事 B では、農業農村開発の技術を「農業および農村を開発するための手段」と定義し、この技術の導入や普及のためには農業農村で生活する人々の本音を正しく把握する必要があると述べ、農業農村社会に技術を導入する際の心構えのようなものを提示している。新技術を導入するということは、現場で働く農家の人々にとって不安があるのは当然である。そのため、急速に新技術を普及させることは難しいことから、「現場の声」にしっかりと耳を傾けながら新技術を導入していくことが非常に重要であるという。

これら 2 つの記事を読むことで、農業農村開発の技術や農業再生のプロフェッショナルである、濱口先生の見解について触れることができた。では、農業再生に関してはほぼ「初心者」である僕たちが被災地の農業再生のためにできることは、いったいどのようなものなのだろうか。それは、「農業再生についての正しい知識を持つ」ことである。今回の 2 つの記事を読んだり講義を聴いたりした中で最も印象的だったのは、汚染土や土壌汚染に関する正しい知識を持っている人が少ないということだ。恥ずかしながら僕自身も、溝口先生の講義を聴いて初めて、セシウムは粘土に吸着して水には溶け込

まないということや、までい工法を始めとした客土よりも低コストでできるより良い除染方法があることなど、農地再生（除染）に関する正しい知識を得ることができた。そして、ここで得られた知識は、日常生活の中では主体的に知識を得ようとしないうりほとんど得る機会がないものである。そのため、世間では現在行われている農業再生の方法（例えば除染方法）が正しいものであると信じて疑わない人が多く、最終的には農業再生をすることができても、多くの除染土が残ってしまうなど、結果として地球環境に悪影響を与えてしまうことにもなりかねない。したがって、これからの日本の未来を担っていく世代である私たちが「農業再生についての正しい知識を持つ」ことは、適切な方法のもと農業再生を行なっていく上で、非常に重要であると言える。また、正しい知識を手に入れるために、講義に関する資料や農業再生・農村開発などに関するトピックがまとまっている、溝口研究室のホームページ(Mizo lab.)もうまく活用していきたい。

また、正しい知識を持つことはもちろん、それを発信していくことも同じくらい重要である。インターネットが普及した現在の世界では、SNS等を用いれば、あらゆる人々が情報を容易に発信することができる。それゆえ、正しい知識を持つ人々が、日常会話やインターネットといった手段を用いて情報発信を積極的に行なっていけば、自ずと正しい知識を持つ人も増えていくだろう。

専門知識を持たない僕たちにできることは、溝口先生を始め、最先端の研究を行なっている「プロフェッショナル」の方々から正しい知識を学び、それを発信していくことに尽きる。ここで重要なのは、自ら主体的に、農業再生に関する正しい知識を手に入れようとする姿勢である。マスメディアで論じられていることを、鵜呑みにするべきではない。講義では、除染方法について同じことを報道しているにも関わらず、飯舘村農業委員会会長である菅野氏のコメントのうち、「机上の発想と違い、村の実情にあって莫大な金もかからない方法だ」という部分が東京新聞から削除されたという話を聞いた。この話だけでも、マスメディアに対する疑念を抱かざるをえない。繰り返しになるが、農業再生に関しては初心者である僕たちが、主体的に農業再生に関する正しい知識を得てそれを発信していくことが、手軽にできて、かつ適切な方法で農業再生を進めていくための原動力になると言えるだろう。1人ひとりの意識の改革が、やがて社会的な波となり、日本の農業再生の政策をより適切で効果的なものへと変貌させる力となるだろう。

<参考文献>

「飯舘村に通いつづけて約8年 土壌物理学者による地域復興と農業再生」

<<http://www.iai.ga.a.u-tokyo.ac.jp/mizo/edrp/fukushima/fsoil/columbus1905.pdf>>
2019年6月29日アクセス。

溝口 勝 「農業農村開発の技術を考える」

< http://www.jiid.or.jp/ardec/ardec60/ard60_key_note_g.html >
2019年6月29日アクセス。